

変容

無常迅速、六十歳になった。

いよいよ還暦かとつぶやいてみて、なにかとんでもないことになったようでもあるし、以前から思っていたのとちよつと違うなという感じもある。しかし、遙かに遠い筈だった自分の老境に向かつてジリツとまた一步、否応なしに押し出されたのは確かで、楽しくはない。

なにしろ気に入らないから、出来れば振り向いて後戻りしたいけれど、ここにこうして来て見ればナンダ四十、五十の時と別に変りはないじゃないかと思いたい気分も大いにある。困ったことに心根未だに熟さず、老成には遙かに遠く、戸惑ってばかりいるし、老眼こそ近年明らかになつたけれど食欲も色欲も四十代と変らぬ。ちつともトシを取つたという自覚が無い。還暦といえば文句無く老人の部類かも知れぬが、そこに何の疑義も無かつたのは昔の話、よそさまの出来事であつて、はた迷惑であるうが何だろつが自分だけは例外なのである。

過去の人といえは珍しや皇太后が車椅子に載せられて庭に出ておられるカラー写真が先日の朝日の夕刊に載つていた。つばの広い日除けの黒帽子を被り、口をへの字に結んで藤色の花の枝を見上げている。近影の公開は五年ぶりとのこと、ふつくらとしたしもぶくれのお顔はほんとに久しぶりであつた。無縁だと思つたら天皇家の人たちには一向に関心は無いが、この方だけは特別で、折にふれ近頃どうしておられるかとカミサンに話すことが何度かあつた。

それというのもこの十年、三度の食事から毎晩の添い寝、シモの世話にいたるまで何から何までカミサンに全面的に面倒を見て貰つている私の母親が、まさに明治三十六年の九十三歳でこの方と同年である。それだけに年ごとに、いや最近では日ごとに進行する我が母親の老耄ぶりから、やんごとなきお方のそれを遙かにおもんばかつているつもりで、余計なお世話だけれど

「本人もだけれど、お付きの人達がさぞかし大変だらうなア、あれこれと」

「そつよねえ」

などと同じ問答を繰り返して来た。

実はその辺が私のずるいところで、ワカッテイルかの如き感慨をこんな風に漏らすことでカミサンの昼夜を問わぬ介護の労を大いに多としている心算なのだから、皇太后はダシであつた。

手も足もひどく擦じれているので箸もスプーンもうまく操れず、口許に飯を運ぶのが難しい、震える両手で汁を啜ろうとすると曲がつた腰が支えを失つて左に崩折れ腕が傾く。着物に隠れて一見ちゃんと座つてるように見えるが、身体は初めから二重に折れ曲がつているので、時と共に次第に倒れてくるのは止むを得ない。手伝わなければ一膳の飯に二

時間もかかる。老いた母親の悪戦苦闘の食事を見てると自分まで指や肩に力が入って困憊する。

からだがそんなふうであまり難儀らしいから、もう箸はよして手掴みで食べたらどうなの、きつとその方が楽だよ、といえは耳だけはまだ良く聴こえる母は苦笑いしながら合点々々するので、この衰えた「からだ」に閉じ込められた母の「たましい」は、しかし、依然として健在で、つまりおふくろそのものはまだちゃんとこの枯れた「からだ」の中に、瑞々しく生きているのがわかる。実際この状況のもとで苦笑いが出来るといふのはたいした余裕である。

いまや骨と皮ばかりになったこの「からだ」に、九十三年前、何かの因縁で寄寓することになった母はそれ以来現在まで、作州で童女だった頃や大阪赤十字病院で看護学生だった頃と、あるいはひよっとしたら彼女の誕生日と比べてさえ、その内側ではちつとも変っていないのではないだろうか。九十歳の女も六十歳の男も「からだ」に見かけの違いがあるだけで、その中に入っているヒトの本質は変わらない、つまりヒトの「こころ」は歳をとらないのではないだろうか。「からだ」の一部である脳が老化すれば仕方がない、そこに寄寓している「こころ」の表現のありようは変らざるを得ないけれど、それは「こころ」が変型したのではない。ハードが古びただけでソフトが健存していればヒトは歳を取らないのだと思う。少なくともヒトの肉体と精神の老化の仕方には相当の違いがあるようだ。そう思ってみれば、還暦を迎えた息子が老いたという自覚がまだ持たなくて訝しがっていても何も不思議ではない。

もし自分が生き永らえて九十三歳になり起居もままならぬ「からだ」になっても、皺苦茶の皮膚の内側には三つ子の時と変らぬ「たましい」があつて外界を眺め廻しているに違いないと思うが、その時にはボンコツ化して身の丈に合わなくなった「からだ」を苦笑いしながら客観的に見ることの出来る、現在の母の持つている余裕が欲しいものだとしみじみ思う。

還暦を迎えて最初にしたことは伊藤整の小説「変容」を読むことだった。四十年前、岩波の堅苦しい総合雑誌に連載されていた小説で、のちにこれが人の老境を描いて警抜、古典のひとつとなるとは考え及ばなくて当時は見向きもしなかった。変の字が鬱陶しい旧漢字であつたような気もするが、多分そんなことはないだろう。

岩波文庫版のカバーの惹句を引用させて貰う。
「老年期に入ろうとする主人公たちの心理や行動は性の快楽が青年の特権ではないこと、それらの行為を通して人生の真実により深く到達するのは若者や壮年よりも老年である」とを啓示する」と。

近年の自分の右往左往ぶりを顧ると、この一節はまさに我が意を得たりではあるけれど、雑用山積、まだ半分しか読んでいない。